

わか れ坂ざか の地蔵じぞう



登場人物

ナレーター

父ちち

子供こども

お地蔵様じぞうさま

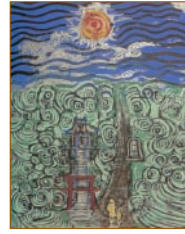
村人1むらびと

村人2むらびと

村人3むらびと



1



2



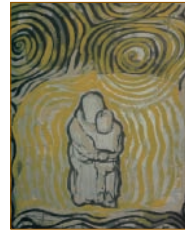
3



4



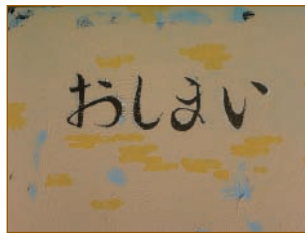
5



6



7



8



海老名の中河内にある貴日土神社は、お日さまを尊び、土を尊ぶ
お百姓さんが豊作を祈願、感謝して建てられたといういわれがあり
ます。

その神社のわきには、わかれ坂(吾妻坂)という坂があります。
その坂の途中にあるお地蔵さまには、こんなお話があります。

むかし、この土地に貧しい父と息子の親子が住んでいました。

ある時不作が続き、親子の食べる物が全くなくなってしまいました。

「おとう、お腹すいたよう」

「そうだなあ、このところ、ろくな物食うてないからなあ」

「何かないんかなあーおとう」

「すまないなあ、もう少しがまんしてくれえ」

「もう、フラフラだよ」

父 「ごめんよう：腹いっぱい食わしてやりてえがなあ」

泣きながら、食べ物を探しまわる子供を見かねた父親は、思い悩んだ末に、イモどろぼうをすることにしました。



子供

父

子供

父

子供

父



父

お地蔵様

その夜、見張り役の子供をつれて、イモ畑に向かった父親は、途中
わかれ坂のお地蔵さまに立ち寄りしました。
そして、目を閉じ、手を合わせて願い事をしました。

「お地蔵さま、お願いがあります」

「何かな？言うてみい」

「これから、他人さまの畑にイモを盗みに行きます。悪いことだ
ということは、充分知っています」

「これこれ、知っているのになぜ行くのだ」

「なにぶん食べるものがありません。このままだと子供は死んでし
まいます。どうか誰にも見つからず、誰にも知られぬようお守り下
さい」

と何度もお願いをしました。

そして、目を開けると、なぜか今まで曇っていた夜空に、お月さま
がこうこうと輝きだしました。

その光の中には、今までそばにいた子供がお地蔵さまに変身してい
るではありませんか。



お地蔵 「これ、お前がこれからしようとしている事は、月もわたしもみて

いる」

父 「ひゃあ、はい」

お地蔵 「悪いことは、隠かくしようせるものではない。そうであろう」

父 「はい：しかし：でも」

お地蔵 「それに、お前の子供も見ている。それが悪いことだとは、お前が一番知いちばんっているではないか？」

さとされて、ハツと我われにかえった父親は、

父 「はい、お地蔵さま。おらあが間違まちがっていました。もう悪いことはしません」と言いい、あやまりました。

すると、目が覚さめた父親のそばには、もとの姿すがたにもどった子供がたっていました。

心に迷まよいがあった父親の目には、子供がお地蔵さまの姿に見えたのでした。

子供 「おとう、帰ろうよ」

父 「ごめんよ。おとうは、なんとバカなことを、しようとしたのだ。



ゆるしておくれよ」

子供を抱きしめ、その手を引いて山道を一目散に、家にかけてもどりました。

子供

「おとう、おらあもがんばるよ」

父 「ありがたいよ。おとうもがんばるよ。もう二度と悪いことを考えるのはよそう」と心にちかいました。

それから、近所の人たちから少しずつ食べ物を借りて飢えをしのぎましたが、次の年も不作はつづきました。しかし、なぜかこの親子の畑だけが豊作になりました。

父

「イモだが、食べてくれんか」

村人 1

「これはありがたい。おれの畑は、今年も不作だ」

父

「なあに、お互い様だ。遠慮はいらんよ」

村人 2

「いつもすまねえなあ。これで子供たちにも、腹いっぱい食わしてやれるよ」

村人 3

「ほんとに助かるよ。子供たちの喜ぶ顔がみえるようだ」

村人 1

村人 2

村人 3

村人 1

不作の時の苦し^{くる}さや、お地藏さまのことが忘れ^{わす}られない父親は、近所の人たちに、惜^おしげもなく食べ物^{たす}を分けてあげたのでした。

「おれのところも助けてもらったよ」

「おれのところもだ。ありがたいなあ」

「あの親子は、優^{やさ}しくて親切^{しんせつ}だね」

「その上、正直者^{しやうじきもの}だ」と村人は、口々^{くちぐち}に言いました。

親子はその後^{のち}も、みんなから親切で正直者だと感謝され、尊敬^{そんけい}され続けたそうです。

わかれ坂には、今もお地藏さまが、『みんなが幸せに暮^くらせるように』と、見守^{みまも}っております。